

翻刻 渡部寛一郎日記4上(大正五年)

渡部寛一郎文書研究会

(要木純一・竹永三男・板垣貴志・内田融・大國由美子・大原俊二・居石由樹子・小林啓治・小林奈緒子・杉谷直哉・原洋二・本井優太郎・森安章)

摘要

渡部寛一郎文書は、渡部寛一郎日記、剪淞吟社に結集する人々の漢詩と関連文書、若槻礼次郎ほかの渡部寛一郎宛書簡、私立中学校修道館など渡部寛一郎が関わった教育関係文書などで構成されている。中国文学・歴史学などの学際的研究によってこれらの諸文書を解読・分析し、近代日本の漢詩文学と政治文化の関連を山陰地域に即して実証的に追究することが本プロジェクトのめざすところである。今回は、渡部寛一郎日記第四冊(大正五年)の手帳の渡部寛一郎が朝鮮を旅行した部分の日記記事を翻刻紹介する。植民地化後数年たった、当時の朝鮮の様子が分かる。寛一郎は、日本人官僚と会談し、日本人、朝鮮人の教育機関を視察する。島根県出身の各界人士と旧交をあたため、名勝旧跡をめぐり、詩会に参加している。

キーワード：渡部寛一郎 近代 政治 教育 漢詩 朝鮮

【解説】

「渡部寛一郎日記」(以下「日記」と略記。松江市新雑賀町原洋二氏所蔵「渡部寛一郎文書」)の中、今回翻刻するのは「朝鮮出遊紀行録」で、本誌前号掲載の【表1】「渡部寛一郎日記」の目録番号1・4の手帳に、同年一〇月の大原郡木次行の記事とともに収録されている。

渡部寛一郎のこの朝鮮旅行は、この後、県会議員在任中の一九二七

年四月二七日(下関発)〔五月二二日(下関着)〕の日程で行われた島根県会議員一〇名による朝鮮(釜山・浦項・京城・平壤)・中国東北部(奉天・哈爾濱・長春・大連)視察旅行(「満韓視察報告書」一九二七年五月一五日、「渡部寛一郎文書」6・34・1・7)に先立つものである。今回の旅行を企図した経緯は明確でないが、この年三月に一九〇七年以来校長を務めていた浜田高等女学校を退職した。これにより、

一八八三年の私塾普通学舎開設以来、一八八八年に開館した進取学館、一八九〇年に設置された私立修道館(一八九六年、私立尋常中修道館)と続いた学校の経営という重責から解放されたこと⁽¹⁾を契機として、次男啓次郎・美小穂夫妻のいる京城(現ソウル)を訪ねたものと考えられる。

旅行の日程と訪問地、面会者等は【表1】、その足跡は【図1】のとおりで、四九日間に及ぶ大旅行であった。その詳細は、以下の本文によって確認していただきたいが、日記の記述から確認できる今回の朝鮮旅行の特徴と注目すべき点は次の三点である。

第一に、渡部寛一郎は、今回訪問した朝鮮各都市で、現地在住の日本人・島根県関係者を訪ね、また訪問を受けているが、その前提となるのは、一九一〇年八月の韓国併合から一年九か月を経て、朝鮮に渡り在住する日本人が増加していたこと、その多くが都市部に集中し、都市人口に占める日本人の比率が大きかったことである(【表2】)。渡部寛一郎が訪問した一九一六年末の在朝日本人は三二万人余で、人口比は一・九三%であったが、府・郡・都市別の人口が確認できる翌一九一七年末の統計数値によれば、釜山の四五%余を筆頭に、大邱・京城・公州・平壤で二〇%を超えていた。七月一五日の京城ホテルでの「県人大会の招飲」に代表される現地在住日本人・島根県関係者との交歓はこの事実を前提としていた。

第二に、渡部寛一郎は訪問地の名所旧跡を訪ねているが、巡覧先で最も多いのは、各地の学校であり、勸業施設であったことである。浜田高等女学校退職まで、一貫して教育界に身を置いていた彼の関心は、初めて訪問する朝鮮でも、同地における学校教育の実際の確認であった。

第三に、旅先での偶然の出会いが、近代史上重要な人物の消息を教えてくれたことである。渡部寛一郎は六月一二日、南山町の京城ホテルに寺田平壤府尹を訪ねたが、そこを「將ニ辞去セントスル際、旅館主人中原(旧姓小原)鉄臣ノ帰来セルニ逢」ったという。自由民権運動における小原鉄臣の活動については、植木枝盛とともに「酒屋会議」(一八八二年)の中心となったことが知られるが⁽²⁾、その後の経歴・消息をこの日記記事によって確認することができる。

なお、この朝鮮旅行の際に渡部寛一郎が詠んだ漢詩は、「青丘詩草」と題して、翌年、寛一郎が所属した漢詩結社剪淞吟社機関誌『剪淞詩文』第六篇(一九一八年七月)に収録された。(竹永三男)

注

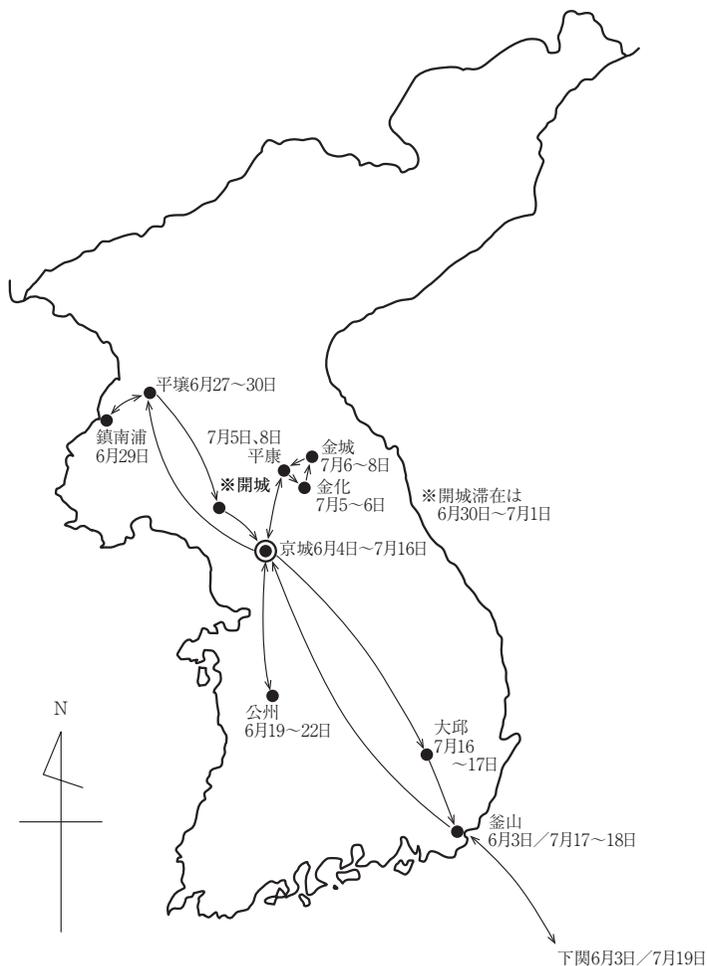
- (1) 原一雄編『渡部寛一郎の生涯』原洋二、二〇〇九年(私家版)
- (2) 家永三郎『植木枝盛研究』岩波書店、一九六〇年。内藤正中「民権フェスティバル―小原鉄臣と島根民権運動の群像」見田宗介編『明治の群像5 自由と民権』三一書房、一九六八年。同「山陰地方の自由民権運動(Ⅱ)」『山陰文化研究紀要』第23号、一九八三年

【表1】渡部寛一郎「朝鮮出遊紀行録」〔1916年(大正5)〕旅程表・主要記事

月日	旅程・見学先・面会人など
6月2日	7時50分、松江駅出発
3日	8時過ぎ、馬関着。直ちに釜山行「対馬丸」乗船 21時過ぎ、釜山着。23時、釜山発、鉄道乗車
4日	京城・永登浦着。渡部啓次郎ら出迎え 8時50分、京城・南大門着、市街・南山見物
5日	在京城の知人訪問
6日	市街見学
7日	京城高等女学校参観。百花園・京麓焼釜場・朝鮮人商店町見学
8日	京城中学校、李王職美術品販売所参観
9日	朝鮮ホテルで夕食
10日	昌徳宮拝観、博物館・動物園縦覧
11日	松永武吉京畿道長官(元島根県知事)訪問。内地人詩会(曹谿寺)に出席
12日	京城ホテルで「旅館主人中原(旧姓小原)鉄臣」に会い晚餐
13日	朝鮮総督府内一覽、持地六三郎土木局長(元文部視学官)に面会
14日	佐藤喜八郎(半農)を旅館天真樓に訪問、公州行きを約す
15日	降雨甚だしく公州行き延期
16日	佐藤喜八郎らと市街遊覧。教育倶楽部等を参観
17日	矢野敬重の訃報に接し龍山の矢野宅を弔問
18日	啓次郎の案内で清涼里遊覧、閔妃・嚴妃の陵墓参観
19日	8時30分佐藤喜八郎夫妻と南大門発の汽車で公州行き。佐藤の女婿小原新三は忠清南道長官。佐藤の二女女婿の小松浅五郎道事務官にも面会
20日	道書記官の案内で公立の普通学校・尋常高等小学校・農業学校等を参観
21日	文廟・拱北楼・靈隠寺・道庁・書堂参観
22日	公州出発、龍山で弥勒菩薩石像見学。佐藤と別れ、21時京城帰着
23日	成田魯石を訪問し詩話
24日	龍山の矢野敬重の遺族を慰問
25日	永江玉子来訪。啓次郎一族らと記念撮影。富谷真、『平壤案内記』持参
26日	21時40分、平壤行きに乗車
27日	4時過ぎ、平壤着。道庁に井川敏衛訪問。牡丹墓に登り、箕子陵参拝
28日	高等女学校・尋常高等小学校・女子高等普通学校・平壤中学校・妓生学校参観。牡丹墓小牧茶店で開催の県人会招宴に出席
29日	6時、汽車で鎮南浦に行く。久原精鍊所参観、市街縦覧。19時発で平壤帰還
30日	13時30分発、17時39分開城着。郵便局長と懇談
7月1日	人參専売所、第一公立普通学校・内地人尋常高等小学校参観。市街巡覧後、17時48分、開城発、19時過ぎ京城帰着
2日	大城病院で健康診断。成田校長と午餐
3日	総督府課員の案内で、高等普通学校・高等女子普通学校・工業伝習所・経学院等参観
4日	静養。女学校佐々木教頭の招飲に応ず
5日	9時20分、南大門発の汽車。12時59分、平康着、人力車で18時、金化着
6日	7時前、馬車で出発、11時過ぎ、金城着
7日	学校参観、憲兵派出所・郵便局訪問
8日	早朝、馬車で金城出発。11時過ぎ平康着。14時発の汽車で17時、京城着
9日	松永武吉等訪問。龍山聯隊の同郷人竹内某来訪
10日	松永武吉の紹介を得て景福宮参観。胃腸不快のため古城病院で診察、投薬
11日	私立技芸学校・美陵商業学校参観。京城官公立中等学校長・私立商業学校長等の招宴に応ず
12日	永井誠一ら歴訪。富谷真の招飲に啓次郎と応ず
13日	告別回り。夜、家族一同と漢陽公園散策
14日	栗田未亡人來訪、総督府商品陳列場参観
15日	告別回り。京城ホテルで県人大会の招飲に応ず。50余人の出席で盛会
16日	8時30分、京城発。16時過ぎ、大邱着。市場見学、達城公園遊覧
17日	牛尾氏の案内で中原氏果樹園・蚕製製造所・種苗場・内地人尋常高等小学校・公立普通学校参観。16時、大邱発、19時、釜山着
18日	釜山第五尋常小学校巡視。川崎医院訪問。20時30分、新羅丸出港
19日	7時30分、下関着、9時50分、発車。21時、姫路着、駅前の菊水旅館に投宿
20日	8時50分、姫路発。和田山経由で19時前、無事帰宅

出典：「載渡部寛一郎日記 大正五年 朝鮮出遊紀行」(「載渡部寛一郎文書」1-4、本号翻刻掲載)により作成

【図1】 載渡部寛一郎の「朝鮮出遊紀行」の旅程と経路



出店：「載渡部寛一郎日記 大正五年 朝鮮出遊紀行」(「載渡部寛一郎文書」1-4、
本号翻刻掲載)により作成

【表2】 渡部寛一郎が訪問した都市・地域在住の日本人数とその比率

	内地人			朝鮮人		総人口	
	戸数(戸)	人口(人) A	A/B × 100	戸数(戸)	人口(人)	戸数(戸)	人口(人) B
朝鮮全土	93,357	332,456	1.96	3,107,219	16,617,431	3,205,767	16,968,997
京城府	17,578	66,565	26.29	39,929	184,502	58,003	253,154
公州郡公州	403	1,426	20.77	1,129	5,307	1,569	6,865
平壤府	3,206	11,609	20.06	10,158	45,577	13,542	57,878
開城郡開城	348	1,205	3.10	7,664	37,636	8,039	38,909
金化郡	94	207	0.31	12,034	65,144	12,157	65,891
大邱府	3,225	11,557	29.85	6,388	27,016	9,661	38,716
釜山府	7,177	27,726	45.08	7,556	33,578	14,780	61,506

注：朝鮮全土は1916年末、府・郡・都市部は統計初出の1917年末の統計数値。『朝鮮総督府統計年報 大正六年度』

1919年3月により作成(国立公文書館アジア歴史資料センター・デジタルアーカイブ)

〔凡例〕

一、本号では、「渡部寛一郎関係文書」(松江市新雑賀町・原洋二氏所蔵)から、渡部寛一郎日記第五冊を翻刻した。横罫の手帳を縦書きに用いて、大正五年の記事を載せる。主に、朝鮮旅行記とメモ、木次地域訪問記とメモの二つの部分から成り立っている。今回は、その前者の翻刻を行った。

一、原本は、淡緑色革表紙、横罫十六行の手帳である。横約八・〇センチ、縦約一二・五センチ。表紙左下隅に「Y85」が金字で刻されている。

一、読みやすいよう句読点を附した。句読点の付け方には統一的な基準はない。原文にも句読点が付けられているが、必ずしも本稿のものとは一致しない。

一、合体字はカタカナ書きとした。

一、漢字は原則として常用漢字体を用いた。

一、不明文字・判読不能文字は、字数に従い、□□とする。字数が不明な場合は、「」を用いた。

一、本文は、削除や後補が錯綜しているが、後補したものを含めて翻字し、削除や訂正は、必要と判断したもののみ、削除記号を付して、訂正前を示したり、注記を付したりした。

一、適宜「」を付して注記を補った。

一、原文の改行は、特に必要と認めた場合以外は追い込みとした。逆に読みやすいように、改行した部分もある。

一、本文の文字サイズは同一とした。小字注は()を加えて示した。特にメモの部分は、内容を捕捉することに重点を置き、縦書き・横書き・見せ消し・文字の大小・改行・空白など、必ずしも原文の体裁の

通りではない。なお、二重線や記号(◎)、固有名詞の右傍の「○」(圏点)などではできるだけ原文にある通りに付けた。

〔本文翻刻〕

朝鮮出遊紀行録

大正五年六月

二日。天気晴朗。午前七時五十分、上汽車ニテ松江発程。ま紀、春子馬潟マテ同車見送レリ。

三日。天候前日ノ如シ。午前八時過馬関着、直ニ釜山行對馬丸ニ搭乘。荷物検査ヲ経テ坐ヲ定メ、入浴了テ休息。此日風波ナシ。海上猶家ニ居ルカ如シ。午后九時過釜山安着。停車場ニテ凡一時間余休息。十一時発汽車ニ便乗シタリ。

四日。晴。啓次郎、信夫同伴、永登浦ニ出迎、同乗シテ午前八時五十分京城南大門ニ到着。美小穂、静江同伴ト栗田徳【?】氏、其叔父華【?】崎武次郎等出迎ヲ請ケタリ。栗田氏同伴、啓次郎寓所ニ入り、昼飯ヲ共ニシ再会ヲ約シテ相別レタリ。飯后小憩后、啓次郎案内ニテ、市街一部ト南山ノ一斑ヲ見物シテ帰寓。晚餐后、更ニ市街一部ノ夜景ヲ見物シテ帰寓、就寝。

五日。曇。午前車ヲ命シテ成田校長、佐々木教頭。及旧知松永武吉氏、郷人永江誠一、四方田栄太郎、古城憲治諸氏ヲ歴訪シテ、正午過帰寓。后三時過ヨリ風雨、黄昏特ニ甚シ。啓次郎同伴、其旧下宿主伊藤商店ニ至リ、古物類一覽、抹茶ノ饗応ヲ請ケ。暫ク談話ニ時ヲ移シテ帰宿。此夜坂井、岡部両氏郵書入手。

六日。半陰半晴。午前、単独ニテ南大門付近迄散策。市街一斑ヲ巡覽シ、大坂屋號書店ニ立寄り、地図ヲ購求シテ帰宅。店長ハ郷人内藤氏。

午后来訪、暫ク談話ニ時ヲ移シテ辞去セリ。此夕、富谷真氏、其息女某ニ大鯛一枚ヲ持参セシメテ、余来京ヲ慰藉シタリ。此夕来訪者富谷真、四方田栄太郎、永江誠一諸氏ニシテ、晩酌ヲ共ニシ、暫ク談話ニ時ヲ移シテ辞去セリ、夜間、女学校教頭佐々木氏来訪ニ付、更ニ一酌ヲ催フシタリ、十一時過就寝。

◎七日。半陰半晴。午前、京城高等女学校ヲ參觀シタリ。学校ハ南山ノ麓ニ在リ。午后三時過ヨリ、啓次郎同伴、百花園ト京麓燒釜場ヲ參觀シ、帰途、光熙門通純鮮人商店町ヲ散策シテ帰宅。此夜、古城憲治氏来話、十一時過辞去セリ。

八日。半陰半晴。午前、京城中学校ト李王職美術品販売所參觀セリ。午后、寓所付近散策、黄昏ヨリ降雨、此日、成田君来訪セシモ、本外出中面晤ヲ得ス。

九日。夜来降雨、午后曇。午前、成田君ヲ其宅ニ訪ヒ、前日ノ答札ヲ述へ、且来十一日雅会開催ノ打合ヲ為シタリ。此夕、古城憲治氏ノ招待ニテ、(朝鮮ホテル)ニ於テ、啓次郎ト共ニ西洋料理ノ饗応ヲ請ケタリ。此夕、外出前、竹田傳七氏ノ来訪ヲ請ケタリ。

十日。夜来雨アリ。天気陰鬱。此日、午前、昌徳宮ヲ拝観シタリ。古城憲治氏ノ紹介ニテ、李王職務官分氏ニ頼リ、拝観ノ手續ヲ為シタリ。先、金虎門ニ至リ、刺ヲ通シテ案内ヲ請フ。案内者ニ伴フテ、先、仁政殿ヨリ宣政殿ヲ拝観シ。夫ヨリ、秘苑ト其一部ナル博物館、及動物園ヲ縦覧シテ、正午過帰宅。午后三時ヨリ、啓次郎同伴、新龍山ニ至リ、付近遊覧后、栗田氏方招飲ニ応ジテ、晩餐ノ饗応ヲ請ケ、九時過帰宅。

◎十一日。快晴。午前、松永君ヲ其官舎ニ訪問シ、暫時談話シテ帰宅。午后、成田光君ノ紹介ニテ、大和町曹谿寺ニ於テ開催セル内地人詩会

ニ出席、唱和数首アリ。別記ニ詳カナリ。出席者、成田魯石、江原如水氏等ヲ始め八名ナリキ。午后三時ヨリ十一時ニ至テ散会セリ。近来、快適ノ清勝会ナリシ。会場曹谿禪房ハ南山ノ麓ニ在リ。無量寿山曹谿寺【ト脱カ】称ス。曹洞宗寺院ニシテ、近年新築ニ係ル。眺望絶佳ノ勝地ナリ。

十二日。曇。午前、竹田傳七氏ヲ其寓所南大門通ノ商店ニ訪問シテ、帰宅喫飯。午后三時過、平壤府尹寺田氏ヲ、其寓所南山町(京城ホテル)ニ訪問シ、談話ニ時ヲ移シテ、將ニ辞去セントスル際、旅館主人中原(旧姓小原)鉄臣ノ帰来セルニ逢ヒ、更ニ引返シテ談話ヲ試ミ、終テ、三人卓ヲ囲テ、洋式ノ晩餐ヲ共ニシタリ。中原氏、旧姓小原、安濃郡波根邨ノ人。明治初年ヨリ、中年迄政治ニ狂奔セシモ、断然志ヲ改メ、実業界ニ貢献セシ所アリシ投セリト云。東城ホアルホ別席食事中、天真樓ヨリ電話アリ。佐藤半農ヨリト依書アリ即時来酌ヲ頼ムトノ伝言申来リ、依テ、食后匆匆、同ホテルヲ辞去シテ天真樓ニ至ル。則半農夫妻晩酌中ト付ナリ。互ニ久闊ヲ叙シテ同酌。十時過、辞シテ帰宅。同席者ハ大坂屋席【號の略字】支店長内藤某一人ナリキ。

十三日。午前晴。午後微雨。午前、本田常吉氏ノ案内ニテ、総督府内を一覽。(シテ帰宅。一覽中)持地六三郎氏ヲ土木局長室ニ訪問シテ面会。久闊ヲ叙シテ辭去シタリセリ。氏ハ去ル明治卅一年頃、文部視学官トシテ来松セシ際、面識セシ人ナリ。午后、在宅静養。夜雨甚シ。

◎十四日。夜来風雨甚シ。終日在宅。黄昏、約ヲ趁フテ、佐藤半農ヲ其旅館天真樓ニ訪問シテ、晩餐ヲ共ニシ、公州行ノ事ヲ約シテ十時過帰宅。

十五日。降雨前日ニ続テ甚シ。此日、八時三十分南大門発汽車ニテ、公州行ノ予定ナリシモ、降雨ノ為メ、道路不通トナリシ報アリ。延

期シタリ。

十六日。快晴。午前在宅。午后、栗田未亡人及古城博士来訪。更ニ佐藤喜八郎氏夫妻来訪。付近散策ノ誘引ニ任セ、啓次郎同伴、外ニ大坂屋号支店長内藤氏随伴。五人ニテ市街遊覧、教育倶楽部等參觀ノ末、支那料理店金谷園ニ投シテ、晩酌ヲ共ニシ、了テ、夜店光景ヲ一覽シテ、告別帰宅。

十七日。晴。午前、古城氏ノ紹介ニテ、工業試験所參觀シタリ予定ナリシモ、俄ニ矢野敬重死去ノ報ニ接シ、直ニ龍山ナル其寓所ニ吊問シタリ。正午、一旦栗田氏方ニテ引取り、喫飯少憩ノ后、更ニ矢野氏方ニ至リ、遺骸納棺ヲ了リ。再ヒ栗田氏ニ至リ、晩餐ヲ喫シ了テ帰宅セシハ、正二十一時過ナリシ。

◎十八日。快晴。午前啓二【次の誤り】郎案内ニテ、京城ヲ距ル東北一里余ニ在ル清涼里ヲ遊覧シ、閔妃、嚴妃ノ陵墓ヲ參觀シタリ。了テ、陵山松林間ヲ散策シテ、二時帰宅。喫飯后少憩。夕刻、啓二郎旧下宿主、伊藤某来訪。留メテ囲碁ヲ催フシ、且晩餐ヲ饗シタリ。了テ、更ニ碁ヲ囲ミ、十一時ニ至リ就寝。

十九日。晴。佐藤氏トノ約ヲ趁フテ、七時前、其旅館天真楼ニ訪問シ、同氏夫妻ト相携テ八時半南大門発南行ノ汽車ニ便乗シテ、忠清南道公州ニ向ヒタリ。公州ハ佐藤氏女婿小原新三氏道長官トシテ在勤セル所タリ。就チ小道書記壇上富次郎南大門マヲ出迎万事斡旋鳥致院駅ニテ下車。同地ヨリ自働車ニ便乗。午后一時過、公州着。直ニ長官ノ官舎ニ投シタリ。鳥致院迄、道書記壇上富次郎出迎、万事周旋ノ勞ヲ執リシ為メ、頗ル利便ヲ覚ヘタリ。午餐后、長官小原氏帰来。初対面ノ挨拶ヲ為シ。且、開襟的二懇待セリ。抑、此行ハ十五日実行スル筈ナリシニ、此地方近年稀有ノ降雨ニテ、道路破壊、人車自働車共ニ不通ノ

翻刻 渡部寛一郎日記4上(大正五年)(渡部寛一郎文書研究会)

為メ、今日ニ及ヒタリ。途上、見聞セルニ、公州市街付近ヲ流ル、錦江最汎濫セル痕跡アリ。出水廿八尺余ニ及ヘリト云。出水当時悲惨ノ状、想像スルニ余リアリシ。官舎着后、道事務官小松浅五郎氏ニ初面会ノ挨拶ヲ為シタリ。同氏ハ同ク佐藤氏ニ女ノ女婿タリ。

廿日。曇。午前、道書記原田氏ノ案内ニテ、公立普通学校、公立尋常高等小学校及公立農業学校ト種苗場ヲ參觀シタリ。午后、山城公園ト稱スル所山城公園下ナル産業伝習所ヲ參觀セリ。伝習所ノ側、原蚕種製造所ヲ付設セリ。伝習生式千余名アリ。校舍ハ旧米倉場ナリト云。右參觀了テ、山城公園ヲ一覽セリ。此夕、佐藤氏ノ主催ニ係ル宴会ニ出席シタリ。会場梅の家同席者并席次左ノ如シ。

【図 原図を加工してイメージを示す】

込敷	一	床
同	指	洪 谷
夫	宿	谷
人		
○	小原	渡
○	夫人	十
○	小松	豊
○	夫人	佐藤
○	梅原	同夫人

書記

七時開宴。十時午後【午前の誤りか】一時、帰来就寝。廿一日。曇。午前遊覧セシ場所ハ文廟ト山城ノ一部ナル拱北楼及靈隱。

寺ニシテ、午后八道序ト二三ノ書堂ヲ參觀シタリ。其情況別記ニ詳カナリ。此夕、小原長官輿坐敷ニ於テ、小原夫婦、小松夫婦主人トシテ送別宴会アリ。待遇到ラサルナシ。十一時閉宴、就寢。

廿二日 降雨。此日佐藤氏ト同時ニ公州ヲ辞シ、龍山ニテ弥勒薩【著の誤リ】薩ノ石像ヲ一見シ、太田ニ至リ、此ニテ南北二分手ノ予定ナリシモ、降雨ノ為メ予定ヲ変更シ、佐藤氏一行ハ十二時出發、自働車ニテ龍山ニ向フ。余ハ午后四時発鳥致院行自働車ニテ出發シタリ。官房主事梅原氏送迎ノ勞ヲ執リ、尚發車ノ際渋谷第一部長及学務属原田佐太郎氏ノ見送ヲ請ケタリ。鳥致院六時十分着、直ニ停車場ニ至リ、六時發汽車ニ便乗シテ、九時京城帰着。車中旧門生朝田氏ニ邂逅シテ車中食堂ニテ、夕食ヲ共ニシタリ。

廿三日。微雨、半陰。午后晴。午后三時過、成田魯石翁ヲ訪問、暫時詩話ヲ試ミテ辞去シタリ。黄昏、朝田儀郎來訪。夜間啓次郎ト同伴、市街散策ノ末、花壇(ヒーヤホル)ニテ小憩、帰宅就寢。

廿四日。晴。午前、龍山ナル矢野敬重遺族ヲ慰問シ、帰途、栗田氏ヲ訪問シテ帰宅。午后、岩谷武市及富谷真両氏來訪。談話ニ時ヲ移シ晩酌ヲ共ニシタリ。

廿五日。晴。午前、在宅揮毫。永江誠一氏夫人玉子來訪。十余年来ノ旧情ヲ叙シタリ。使者ニ(ヒール)一打ヲ托シテ惠贈セリ。午后、岩谷武市氏ヨリ(ヒール)半打ヲ惠送セリ。此日、午后、啓次郎一族ト今岡繁子ト記念ノ撮影ヲ為シタリ。黄昏、富谷真氏平壤案内記一卷持參シ呉レタリ。

廿六日。半陰半晴。午前、揮毫。午后、平壤行準備着手、遂ニ在宿。午后九時四十發ニテ、平壤ニ向フ。

廿七日。曇。後降雨。午前四時過平壤着、直ニ車ヲ驅テ、旭町八雲館

ニ投シテ小憩。朝食ヲ喫シ了テ、井川敏衛氏ヲ道序ニ訪問シテ久闊ヲ叙シ、午后、再会ヲ約シテ辞去。夫ヨリ雨ヲ侵シテ牡丹臺に登臨。小牧茶屋ニ小憩。午餐ヲ喫シテ、帰館途、箕子陵ヲ參拜シテ帰館。此夕、井川氏來訪、同宿舟木某等ト晚酌ヲ催フシ央、更ニ旧知中村猪之助及同郷人神庭金一氏來訪、共ニ献酬、且談話ニ時ヲ移シ、十一時過、各自退散后就寢。

廿八日。午前曇午后晴。午前、神庭金一氏案内ニテ高等女学校、尋常高等小学校、女子高等普通学校、平壤中学校及妓生学校ヲ參觀シタリ。一時過帰宿。神庭氏ト午餐ヲ共ニシテ、小憩。夕刻、牡丹臺小牧茶店臨時開催セル県人会招飲ニ応シテ出席。快談満酔、十一時帰宿。旅館マテ送り來リシ井川、荒木、渡部、中村、多田数氏ト更ニ酌シテ相別レタリ。県人会出席者姓名別記トス。

廿九日。晴。午前十時發汽車ニテ、鎮南浦ニ至レリ。案内者トシテハ、井川氏配慮ニテ其部下藤原哲二氏同伴、尚、中村總之助氏モ平壤ヨリ同伴セリ。先、税関ニ至リ山本道夫氏ヲ訪ヒ、来意ヲ告ケ、尚、税関吏日高氏、遣府書記小堀氏等來会、共ニ小汽船ニテ、久原製鍊所を參觀シ、了テ、南浦第一等料理屋玉屋ニ投シ、午餐ヲ共ニシテ小憩。同席者ハ一行三人ト山本氏ト四人ナリ。小憩后、山本氏ノ案内ニテ市街ヲ縦覽シ、更ニ玉屋ニ至リ小憩。其内安井、田中、小堀、松下等、同県ノ諸氏來会。主人側山本ヲ併セテ七人、一行三人ノ為、歓迎ヲ筵ヲ開キ、共ニ快酔。七時發汽車ニ便乗シテ、平壤ニ帰リシハ九時過ナリシ。

卅日。曇。午前、八雲館ニテ静養。午后一時卅分、汽車ニテ發程。五時卅九分開城着。郵便局長某ノ斡旋ニテ、開和館ニ投シタリ。此夜、郵便局長來話。暫ク時ヲ移シテ辞去セリ。

七月

一日。朝雨、后曇。午前、警察署ニ署長齋藤氏ヲ訪問シ、其配神ニテ署員ヲ案内者トシテ、人參專買所參觀。夫ヨリ、第一公立普通学校(普通学校ニ同郷人山本某アリ奇遇)、及内地人尋常高等小学校ヲ參觀。了テ、一旦帰宿、午餐。午后、警察署員ノ案内ニテ、先、南大門ニ登臨シ、夫ヨリ、麗朝忠臣鄭氏ノ邸址。陽書院、及其遭難地美竹橋ヲ一覽シ、夫ヨリ、彩霞洞ニ至リ小憩。文廟、関羽廟、満月臺等ヲ巡覽シ、帰途彩霞洞主朴宇鉉氏邸ニ至リ、面会。邸内一覽シテ、帰宿。五時四十八分発ニテ、発程。七時過、京城着。

二日。晴。午前、大城病院ニ至リ、健康診断ヲ受ケタリ。帰宅スルヤ、成田校長[□]来訪。共ニ久闊ヲ叙シ、且小酌ヲ催シテ、午餐ヲ共ニシタリ。

三日。微雨アリ。后曇。午前九時、総督府ニ出頭。学務課長弓削氏ニ面会、来意ヲ告ケ、其厚意ニテ課員某ヲ案内者トシテ、高等普通学校、高等女子普通学校及工業伝習所、経学院等ヲ參觀シ、午后四時、帰宅。高等女子普通学校ニテ午餐ヲ喫シタリ。此夕、高等女子学校男教員十余名発企ニテ、余ノ為メ歓迎会ヲ原金旅館楼上ニテ開催セシニ付、六時出席。快酔シテ、十一時過帰宅。

四日。曇。終日在宅静養。此夕、女学校教頭佐々木氏ノ招飲ニ応シテ、其宅ニ赴キ、十時過帰宅。

五日。曇。午前九時廿分、南大門発汽車ニ便乗、江原道金城ニ出向ス。十二時五十九分平康着(出迎者趙泰潤)。夫ヨリ人力車ニテ、六時頃金化着。(フジカ)旅館ニ投シテ、一泊。館主ハ内地人ナルモ、宿舍構造ハ殆ント鮮七和三ト称スヘキ一種ノ様式ナリ。

六日。晴。金化、午前七時前、馬車ニテ発程、金城ニ向フ。坂井氏部

下鮮人南宮某自転車ニテ、金化【坂井氏ハ途中】と添書】マテ出迎

ヒタリ。十一時過、金城着。直ニ坂井氏宅ニ投シタリ。

七日。晴。金城滞在。午前学校參觀。帰途、憲兵派出所、及郵便局ヲ訪問シテ帰寓。午后休養。此日夜雨アリ。

八日。曇。四時起床。喫飯。直ニ馬車ヲ駆テ金城出發。平康、午一時過着。二時発汽車ニテ五時過帰京。

九日。半陰半晴。午前、松永、関屋諸氏ヲ歴訪シテ、帰宅。高等女子校職員井上氏来訪。午餐ヲ饗シタリ。午后、在龍山聯隊ノ同郷人竹内某氏来訪。暫ク談話ニ時ヲ移シテ、辞去セリ。

十日。曇。午前、松永氏ヲ京畿道庁ニ訪問シ、其紹介ヲ得テ、景福宮ヲ參觀シ、正午過帰宅。此夕、井上某招飲ニ応シテ至ル。同席者成田、佐々木両氏ト啓次郎ナリシ。帰途、古城病院ニ至リ、診断ヲ受ケテ、水薬一瓶貰請ケテ、帰宅。腸胃不快ノ為ナリ。

十一日。曇。午前、車ヲ命シテ、私立技芸学校ト美陵商業学校トヲ參觀シテ帰宅。此夕、京城官公立中等学校長ト私立商業校長等発企ニテ、(パタゴ)【バゴタの誤りか】公園来旗亭ニテ、小宴ヲ開催シタリ。同席者柴崎、岡、吉田、本宿、和田五氏ナリキ。此日、午后降雨、沛然夜ニ入テ休マス。

十二日。時々降雨。午前永井誠一、村上唯吉氏、竹田傳七氏ヲ歴訪シテ帰宅。此夕、富谷真氏ノ招飲ニ応シテ、啓次郎ト同伴参席。

十三日。曇。午前、在宅。午后、村上唯吉氏ヲ其邸ニ訪問セシモ、又不在。依テ、電車ニテ龍山ニ至リ、栗田氏ヲ訪問告別シタリ。朝[□]此夜喫飯后、家族一同ト漢陽公園ニ散策ヲ試ミテ、十一時過帰宅。

十四日。微雨。午前栗田未亡人來訪。十一時頃ヨリ、美小穂同伴、総督府商品陳列場參觀。午后在宅。

十五日降雨。午后晴。午前成田、佐々木、松永、古城諸氏ヲ歴訪、告別。更ニ女学校ニ至リ、告別、帰宅。此夕(京城ホテル)ニテ開催ノ県人大会并ノ招飲ニ応シテ、出席。来会者五十余名。近来ノ盛会ナリシト云。

十六日。曇。午前八時半、京城発汽車ニテ帰国ノ途ニ上ル。午后四時過、大邱着。牛尾氏舎弟某及野津某等同伴、停車場ニ出迎タリ。夫ヨリ、徒歩ニテ市場ノ状況ヲ一見シ、更ニ達城公園ヲ遊覽シ、旗亭ニテ小憩。夫ヨリ、牛尾氏官舎ニ投シテ、一泊。

十七日。夜来微雨アリ。午前、牛尾氏案内ニテ中原果樹園、蚕種原製造所、種苗場、内地人尋高小学校、及公立普通学校ヲ參觀シテ帰宅、休憩。午后四時、南行汽車ニ便乗出発。七時釜山着、鉄道ホテルニ投宿。此夜、豊田茂代子来訪。

十八日。晴。午前、釜山第五尋常小学校ニ、花田氏ヲ訪ヒ、同氏案内ニテ、校内巡視シ、帰途、川崎医院ニ立寄、豊田氏ニ面会。麦酒ノ饗応ヲ受ケ、更ニ俄秋子ヲ其商店ニ訪問シテ、帰館休憩。午后、豊田、儀、安田(旧姓尼川)三人同伴来訪。暫ク談話ニ時ヲ移シテ、更ニ黄昏再会ヲ約シテ辞去セリ。午后八時、新羅丸乗込。花田金之丞氏并豊田、儀、安田三氏ト豊田良人并儀老母ト良人佐地【代理?】等来訪。栈橋マテ見送タリ。八時半解纜。海上静穏。暫ク甲板上納涼后、就寝。十九日。晴。午前七時半、下関着。九時五十分、汽車ニテ発程。下関ヨリ足立鋏太郎二男并上越氏ト同車セリ。此日、半晴半陰、車内苦熱甚キニハ閉口セリ。九時過、姫路着。駅前菊水旅館ニ投シタリ。廿日。半陰半晴。八時五十分発。和田山經由シテ、七時前、無事帰宅。此日苦熱甚シキニハ閉口セリ。

(完)

【以下、手帖の後側有野部分から】

京城見聞雜記

◎南山ノ麓一部ヲ倭城臺ト称ス。総督府庁ノ所在地ナリ。市街ヲ瞰下シ、眺望佳麗ナリ。

◎百花園。市街東南ノ丘上ニ在リ。鮮人数個ノ邸宅跡ヲ併買収シテ、花卉ヲ移植シタリト云。面積三千六百余坪ト称ス。

◎漢陽高麗燒釜場。百花園ノ地続前面ニ在リ。(場主海市田氏。市街ニ買店アリ)。

◎妓生。(キーサン)或ハ(キーセン)【「ト」抜けか】称ス。現今普通(キーサン)ト称スト云。妓生ニ四等アリ。一等ヲ官妓ト称ス。宮殿内ノ外ハ妄ニ他ノ招聘ニ応セスト云。

◎両班(ヤンバン)ト称ス。元来ハ東班西班牙ト称シテ、文武兩種族ノ称号ナリシカ、現今ハ豪族ノ通称トナレリト云。猶、内地郡村ニ於ケル親方ト称スルカ如シ。

◎京城公立高等女学校。京城府南山町ニ在リ。明治四十一年ノ創立ニシテ、元居留民団立ナリシカ、大正四年度ヨリ学校組合立トナレリ。敷地ハ南山ノ麓ニテ、市街ヲ瞰下シ、眺望ハ稍佳ナルモ、面積狭隘、僅ニ一千五百余坪ニ過キス。生徒惣數六百余名。十四學級ニ編制セリ。別ニ補習科一學級アリ、隔日ニ授業セリ。校舍ハ普通ノ洋風造ニシテ、雨天体操場ト講堂ヲ併用スル等、敷地ノ狭隘ト共ニ建物亦狭隘ナリ。早晚移転改築ノ議アリト云。

◎京城中学校。京城西大門町ニ在リ。元景熙宮【慶熙宮の誤り】所在地ニシテ、高丘ニ在リ。背面、松樹叢生セル丘山ヲ負ヒ、前面ハ市街ヲ瞰下シ、南山ト相對シテ、頗る景勝ノ地ナリ。惣坪五六万坪アリト云。校舍ハ普通ノ洋風造ニシテ、特ニ称スヘキモノナシ。崇政殿ト称

スル旧建物ト稍離レタル場所ニ別ニ、土壁ヲ以テ開隔離シタル内場所ニ宮殿様ノ一部アリ。所謂後宮ナルカ如シ。前者ハ学校ノ物置ニ使用シ、後者ハ教員養成所生徒ノ寄宿所ニ充用セリ。此兩個ノ建物ハ目下頽廢セルモ、本来頗ル鄭重ノ建築ナルカ如シ。一見昔時ヲ偲フ資料ト為スニ足ル。内部構造ハ宛然タル御寺ノ本堂ナリ。生徒惣數七百余名、十六學級ニ編制セリ。別ニ、教員養成所アリ生徒三五人ヲ収養セリ。

◎李王職美術製作所。太平街通一丁目ニ在リ。金、銀、銅、及漆器等製品ヲ陳列シテ販売セリ。

◎朝鮮ホテル。長谷川町ニ在リ。純然タル洋式ノ建物ニシテ、旅客待遇モ亦一切洋式トス。□料一等室一人食事付ニテ凡十円乃至十一円、最低一人凡六円乃至六円半内外ノ宿料ナリト云。此敷地ハ元朝鮮王宮ノ付屬ニテ、祭天ノ場所ナリシト云。今尚、園内ノ中央二三層樓ノ純然タル朝鮮式ノ建物アリ。之ヲ天壇ト称シテ保存セリ。往時ヲ偲フノ一材料タリ。

◎昌徳宮。【空白 後補のつもりか】ニ在リ。現李王ノ住所トス。仁政殿ハ一般公式ノ謁見所ニシテ、構造ハ其回廊等略内地紫宸殿ニ類似セリ。柱及天井等、惣シテ朱塗ニシテ、唐草ノ模様ヲ画ケリ。但、本殿建物ハ三百年前ナルモ。坐張及ヒ備付ノ椅子(テール)等ハ悉皆洋式ニシテ、近年ノ調製ニ係ルト云。宣政殿モ構造ハ大同小異ニシテ、稍狭隘ナリ。内謁見所ナリト云。園内花壇ハ尽ク□牡丹草ニシテ他種ヲ植キ見ス。

◎秘苑。ハ宛然タル小山林ナリ。松樹雜木鬱然林ヲ為シ、所々泉石ノ景致アリ。到处、各種ノ墓樹アリ。其構造ハ内地ニテ見ル所ノ観音堂ノ形式ニシテ、朱塗ノ裝飾モ亦同一ナリ。其第一区ニ在ル各種ノ墓樹中、大ナルヲ宙合樓ト称ス。殿下小憩所ナリト云。其側ヲニ養蚕試育

翻刻 渡部寛一郎日記4上(大正五年)(渡部寛一郎文書研究会)

場アリ、妃殿下ノ試育スル所ナリト云。第二区亦各種ノ墓樹アリ。大ナルヲ太極亭ト称ス。別ニ演芸堂ト称スル一棟アリ、其名ノ如ク演芸ノ場所ナリト云。第三区ニモ亦各種ノ亭樹アリ。逍遙亭、翠寒亭、杯ト称ス。此辺、泉石ノ景致、最幽清ナリトス。翠寒亭ノ柱ニ連額アリ。

一庭花影春留月
滿院松聲夜聽涛

ノ二句アリヲ書セリ。誦スヘキ名句ナリ。

◎天真樓。南山町ニ在リ。純粹日本式ノ旅館ニシテ、(朝鮮ホテル)ノ洋式ト相待テ、第一流ノ旅館ナリト云。之ニ亞ク者、王城館、京城ホテル、等トス。但、庭園ノ広クシテ、樹木景石ノ排置等、幽雅ナルハ、(京城ホテル)【原文(を脱す)ヲ第一ト為ス。

◎清涼里。京城ヲ東北二距ル里余ノ部落ナリ。道路左右楊柳或ハ(ホヅラ)等ノ喬木アリ。鬱然タル翠陰、行人暑ヲ避クルニ足ル。又李王職ノ領域ハ、惣シテ、松樹叢生鬱然タル松山ナリ。閔妃及嚴妃埋骨ノ地ニシテ洪陵ト称ス。陵墓守衛ノ出張所アリ。閔妃陵墓ハ頗ル鄭重ヲ極ムルモ、嚴妃ノ陵墓ハ稍簡略ナリ。蓋、正妾、妾ノ區別ヲ嚴ニシタルモノナリト云。

◎公州ハ忠清南道庁所在ノ地ニシテ、一ノ市街ヲ為セリ。戸數【空白 各所旧跡及農学校、高等、普通学校等アリ。□見聞セル概況如左。

◎公州公立普通学校。程度ハ四ヶ学年ニシテ、男四學級、式百名弱。女二學級、百名弱。一年生国語教授比較的稍觀ルヘキモノアリシ。教師ハ女子ニテ、師範卒業生ノ鮮人ナリ。生徒受業状態、案外整肅。

◎公立尋常高等小学校。一、二、三、及ヒ六学年ハ単式ニシテ、四、五学年ハ單複式ニテ教授セリ、生徒□態度、鮮人ニ比シ却テ不規則ナリ。

高等一、二学年複式ニシテ教授セリ。生徒男……、女……、計……。
◎公立農業学校。二学年ノ程度ニシテ、生徒惣員九十余名。内、寄宿生四十余名、參觀當時ハ恰モ実習時間ニシテ、学科受業ノ実況ヲ知ルヲ得ス。(普通学校卒業生ヲ投入ス)。敷地荳町四反歩余アリ。比較的能ク整頓セリ。

◎種苗場ニ物産陳列場アリ、各種ノ物産ヲ陳列シテ、其成績ヲ比較シ、參觀者ヲシテ一日瞭然タラシム、蓋、米麦改良及蠶蚕種改良ニハ特ニ注意ヲ払フカ如シ。

◎山城公園、公州築城ノ遺址ニシテ錦江ニ臨メリ、南二鎮南樓。北ニ控【拱の誤り】北樓トスル樓門アリ、南樓ハ公州街衢区ニ瞰下シ、北樓ハ錦江ヲ隔テ、平野及峯巒、眺望ノ眼界広シ。山城ノ最高ニ在ル亭ヲ雄心閣ト称ス。総督揮毫ニ係ル雄心二字ノ扁額アリ。中段ハ在ル亭ヲ雙樹亭トス。側ニ、有明朝鮮国公州山城双樹亭紀蹟碑ト題シタル碑石等アリ。控【拱の誤り】北樓門上扁額數個アリ。其中ニ在ル扁額ニ

錦江晴日水潺々。城上高樓試一攀。紅樹秋深人北望。碧空雲尽雁南還。吟酬令節追遺躅。醉把寒花慰旅顏。客路時○今昔恨。不禁双淚淚斑々。【○は不明字か】

觀察使 金嘉鎮

◎靈德寺。山城公園下ニ在ル寺院ニシテ、禪教兩宗本山麻谷寺出張場トス。檀家三十余アリト云。

◎文廟。孔子ヲ祭ル所トス。正殿ヲ大成殿ト称ス。正面ニ大成至誠文宣王ト書シタル位牌アリ。左右ニ顔子、孟子、曾子、子思ト其他十哲ヲ位牌アリ。正殿ノ正面左右ニ東廡、西廡、アリ。朝鮮国ノ太宗ノ位牌ヲ安置セリ。其前ニ講堂アリ。明倫堂ト称ス。旧ト講義ノ場所ト

ス。現今簡易ノ産業伝習所ニ使用セリ。堂内ニ額面アリ、其詩ニ
山嵐潤霽雨中天。泮水淡々錦水連。鄒魯衣冠逢此地。唐虞日月復今年。主賓揖拜覺堂下。老少觀聽杏樹邊。郷飲礼成開講席。昇平勝會画図伝。

崇禎紀元五、乙卯五月下澣

觀察使 李明祖

◎尊經閣。文廟付屬ノ書庫トス。朱文公ノ画像新旧七幅アリ。以テ其如何ニ朱子学ヲ尊重セシカノ一斑ヲ窺知スルニ足ル。其中ニ先生自銘ノ語アリ。

端爾躬。肅爾容。檢於外。一其中。力於始。遂其終。操有要。保無窮。

孝經ト大本ノ四書大全數十卷、稍觀ルヘキモノ。其他觀ヘキモノナシ。
◎書堂。往時内地所謂寺子屋ナリ。一個所生徒五六人乃至十余人ヲ投入セリ。小学或ハ通鑑ノ素読ヲ為サシム。其態度不規則、觀ルニ堪エス。

◎公州一ノ豪家ト称スル洪鐘協氏ノ邸ヲ參觀シタリ。建物數棟アリ。邸ノ周圍土塁ヲ設ク。建築物構造ハ惣シテ朝鮮式ニシテ、觀ニ足ラス。外房、内房ノ区別アリ。外房ヲ舍廊ト称ス。男子ノ居室ニシテ、内房ハ即女子居室トス。其区別今尚嚴ナルカ如シ。

平壤。

◎牡丹臺。市街東北端ニ位シ、大同江ニ臨ミ、眼界広闊、眺望絶佳ナリ。山腹ニ茶亭アリ。小牧茶屋ト称ス。茶店前面ニ朝鮮式ノ一棟アリ。浮碧樓ト称ス。大同江直下ニ在リ。遊覽者眺望ノ場所ト為ス。茶店ノ背後、稍高キ所、卅棟石門アリ。所謂玄武門ナリ。夫ヨリ、漸次登臨、乙密臺ニ至ル。名勝旧跡保存会ノ揭示アリ。其文ニ曰ク、乙密臺ハ牡丹臺ト共ニ錦繡山ノ一角ニ属スシ、昔シハ附近一带老松鬱葱タリシト

云。墓上ノ建物ヲ四虚亭ト号シ、三百余年前ノ創始ニ係ル。遠ク、文
祿ノ役、敵兵、戎衣ヲ脱シテ松樹ニ掛ケ、擬兵ヲ示シ、近クハ、日清
之役、敵將馬玉昆之ニ捩リ、固守セシ所ニシテ、今尚、亭ノ柱楹ニ無
数ノ彈痕ヲ存セリ。廿七年九月十五日、我元山、朔寧ノ兩大隊、此墓
下ニ肉迫シ、同十六日払暁、全軍終ニ平壤ヲ占領セリ、云々（先登者
原田十吉）。

◎箕子陵。錦繡山ノ西北部ノ麓、蒼然タル松林ノ中ニ在リ。朝鮮普通
ノ墳墓ヨリ稍鄭重ニシテ、繞ラスニ土壁ヲ以テシ、且、拜殿アリ。毎
年一回、祭典ヲ執行スト云。

◎文廟ハ其建築構造、公州ノ夫ヨリ稍鄭重ニシテ、且広大ナリ。目下、
公立女子普通学校ニ使用セリ。

◎公立高等女子普通学校。校舍構造純粹西洋式ヲ採リニシテ、
地ニ於ル校舍ノ巨擘ナリ。

◎中学校、目下仮校舍ニシテ、觀ルニ足ラサルモ、新築工事中ナリ。
其敷地ノ如キ、一万式千坪アリト云。新築落成ノ上ハ、觀ルヘキ
モノアラン。

開城

◎人蔘專売所。――

◎菘陽書院。鄭氏ノ邸址ニシテ、旧式ノ学校ニ使用セリ。

◎善竹橋。鄭氏遭難ノ地トシテ有名ナリ。李氏王震書ノ碑アリ。（碑
文別記ニ在リ）

◎文廟。其敷地、及殿宇ノ広大ナルコト、見聞中之ニ及フモノナシ。

◎関羽廟。

◎彩霞閣。幽邃ナル一仙区ナリ。洞主、朴宇鉉。

◎満月臺。麗朝宮殿ノ址ナリ。松岳山ノ麓ニシテ頗ル形勝ノ地ナリ。

京城

◎經學院。昌德宮ノ北背ニ在リ。聖廟ノ在ル所ナリ。目下臨時講義ノ
場所トス。側ニ一郭アリ、科挙ノ場所トス。其殿堂ノ額面ニ丕闡堂ノ
文字アリ。又其内部額面ニ（崇正学。闢異端）ノ六文字アリ。別ニ啓
聖祠ト称スル一宇アリ。孔子ノ父ヲ祭ル所トス。

大邱 内地人八千余。鮮人三万余。

◎果樹園。山口県人中原房一所有。凡六町歩余アリト云。大ニ觀ルヘ
キモノアリシ。（ブドウ）、林檎、桃、等ヲ栽培セリ。（中間作ニンジン）
◎達城公園。市街ノ一隅ニ在リ。散策ニ好適ノ場所トス。

〔付記〕

本稿は、

科研費 基盤研究（C）研究課題〈領域番号19K00296

近代山陰地域の文化教養環境における漢詩文の位置 ―若槻克堂と
剪淞吟社の学際的研究（期間二〇一九―二〇二一年度 研究代
表者 要木純一）

及び、

鳥根大学法文学部山陰研究センター山陰研究共同プロジェクト

近代山陰地域の文化教養環境における漢詩文の位置 ―若槻克堂と
剪淞吟社の学際的研究（課題番号 一九一三 期間 二〇一九―

二〇二一年度 研究代表者 要木純一）
による成果の一部である。

Reprint ; Diary of Watanabe Kanichirou: 1916 (I)

Research Project on Works of Watanabe Kanichirou

[Abstract]

Watanabe Kanichirou (1854-1938) was an influential educator in Shimane prefecture and the head of the society in support of Wakatsuki Reijirou (Kokudoukai). Here we transcribe his diary written on 1916. It recorded his inspection tour to Korea and Kisugi (shimane prefecture). This time we reprint the part of his Korea tour. Through this diary we can perceive how he felt about education, culture, society in Korea which was a Japanese colony. He also made relationship with important persons of educational society and statesmen and beaurocrats in Korea.

Keywords : Watanabe Kanichirou, Korea,colony,education, Taisho, Kanshi,